

教材集使い方の手引き

★活用に当たって

この教材集は、来日直後の児童・生徒を指導する初任者を対象としています。本教材集の学習が終了したら、「日本語指導ハンドブック その2」などを活用し発展学習や繰り返し学習をさせてください。

1 各単元の構成

- (1) 2単元を1課としてまとめ、15課で構成しています。
- (2) 日本語がほとんど分からない児童・生徒が学校生活で戸惑わないよう、初めの7課14単元までは、学校生活に最低限必要な内容とし、その後徐々に主述の整った文章を習得できるように構成しました。

2 単元の項目について

- (1) 指導目標
各課でねらいとする目標を示しています。
- (2) 単元の指導内容
その単元で指導する文型・語彙・トピック・文字について記しています。
- (3) 本時の指導目標
本時の指導目標を示しています。
- (4) 指導のポイント
指導上、特に気を付けることなどを示しています。
- (5) アクティビティ（活動）の方法及び留意点
特に配慮の必要な観点について具体的に示しています。
- (6) 本時の展開
「読む・書く・聞く・話す」の指導がバランスよく行えるよう、1単元の活動を「文型」「表現」「文字」の指導、三つに分けて構成しています。
- (7) 教材・ワークシート
黒板掲示や、カードの作成及び学習の確認として活用できるものです。カードは活用しやすくするため、同じ大きさにしています。

3 文中の記号について

- 【活動】 効果的なアクティビティ（活動）を示しています。「カードゲーム」のページ（3ページ）も参考にしてください。
- 【留意点】 指導内容のうち、留意が必要なことを示しています。
- 【発展】 指導内容を更に発展させるための手立てなどを示しています。
- 【宿題】 家庭学習の内容を示しています。

4 その他

- (1) 児童・生徒は、一人一人学習の進度や言語能力が異なります。児童・生徒の習得状況に即して、個に応じた指導を進めてください。
- (2) 発達段階によって必要な言葉も効果的な学習方法も違います。発展的な学習活動やアクティビティ（活動）の例を参考にしながら、教材や活動を取捨選択して指導を進めてください。
- (3) 既習の表現を用いて対話をするなど、繰り返し既習の表現を使う機会を設けることが大切です。また児童生徒にノートやファイルを用意させ、その後の学習に活用するよう指導してください。
- (4) 母語の使用が、学習内容の理解を進める場合があります。本教材の学習時に母語の辞書などを使って母語を効果的に活用するとよいでしょう。

初級者への日本語指導について

日本語指導の必要な児童・生徒に対する日本語指導では、児童・生徒の年齢、母語の運用能力、学習歴など、「子供の多様性」への対応が求められます。また、日本語で教科学習を進める力を付けなければなりません。そのため、限られた時間で効果的に日本語を指導する必要があります。

1 活用に当たり

よく「子供は語学の天才」と言われます。しかし、言葉は、教師がテキストの内容を解説し、一度練習させればすぐに使えるようになるものではありません。五感や体験を通して身に付けられるよう、根気よく、繰り返し指導を行うよう心がけてください。このハンドブックには「15課30単元」を掲載してあります。単元ごとに必要に応じて時間をかけたり、既に習得できている事項は省略するなど、児童・生徒の習得状況に応じて活用してください。

2 子供の実態に合わせた教材や学習活動

教材やアクティビティ（活動）を選択するときには、個々の児童・生徒の実態に合わせる事が重要です。年少の子供には体験やゲームを通じた学習が効果的であり、語学の学習経験がある年長の子供には、文法的な説明が理解を促す場合もあります。子供の発達段階に応じて教材やアクティビティを取捨選択してください。

3 発音指導

日本人にとっての「l」と「r」の発音同様、外国人児童・生徒にとっては、母語の特性によって発音しにくい音があります。例えば、タイ語話者の「ス」と「ツ」、韓国語話者の「ザ行」、一部の中国語話者の「ダ」「ナ」「ラ」などです。これらは母語の発音と密接に関係しているので、発音指導には時間が必要です。早い段階での厳しい発音指導は、学習意欲を失わせるきっかけにもなります。まずは相手に通じるレベルの日本語習得を目指し、子供の自尊感情を傷付けないよう、発音については徐々に指導しましょう。

4 日本語指導の方法、日本語文法などについて

外国人児童・生徒に対する日本語指導については、教師だけでなく、外部指導者を活用する場合があります。その際、国文法とは若干異なる日本語教育の用語を使う場合があります。例えば、形容詞を「い - 形容詞」、形容動詞を「な - 形容詞」、「かいてください」「よんでください」「みてください」という形を「て形」、「かく」「よむ」の形を「辞書形」、及び「かきます」「よみます」の形を「ます形」などと呼ぶことがあります。教師は、こうした用語や指導法を理解した上で、外部指導者と連携しながら指導に当たることが必要です。

アクティビティに効果的なカードゲーム3種

この教材集には、カードとして使えるワークシートを多く用意してあります。ここでは、いくつかの単元で用いる児童・生徒の語彙を増やす3種類のカードゲームを紹介します。ゲームを行う際には、カードに記された言葉を「言う」ようにすると、耳・口・目を使って覚えることができます。

1 カード合わせゲーム

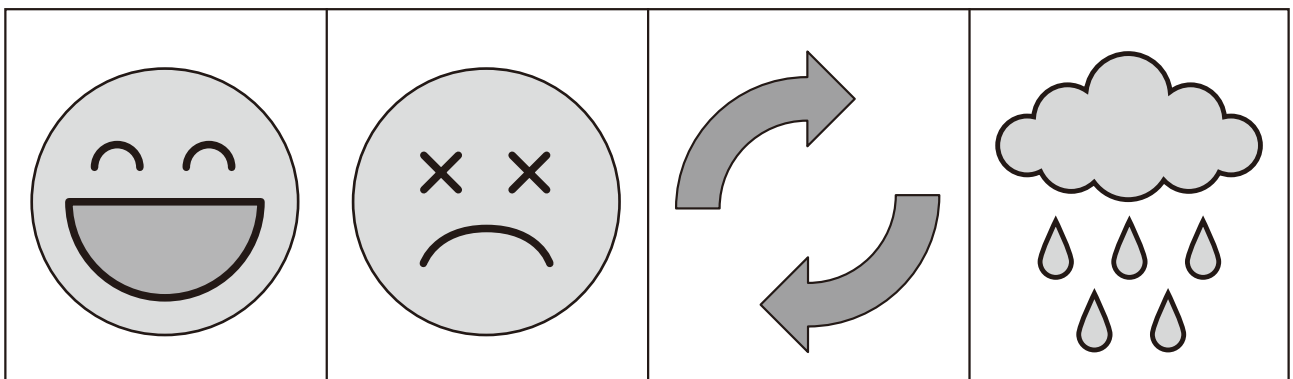
複数のカードを裏返して机の上に置き、表に返しながらペアになる2枚のカードを探すゲームです。絵カード（牛の絵を描いたカード）と言葉カード（うしと書いた文字カード）を合わせたり、形容詞の対義語「大きい」、「小さい」の絵カード同士を合わせたりします。児童・生徒の発達段階や学習経験にもよりますが、2人で5組、10枚程度がよいでしょう。

2 カード取りゲーム

数に関係のあるカード（数カードや助数詞カード）を用います。1人5枚程度配り、かけ声に合わせて全員が1枚ずつ出します。出したカードの大きい者が、カードを取ることができます。カードに示された数や助数詞を正しく「言う」練習になります。

3 カードめくりゲーム

文字カードや動詞カード、名詞カード、形容詞カードなど、種類の同じ30から40枚のカードを中央に置きます。カードを1枚ずつめくって言葉を正しく言うことができたなら、そのカードを取ることができます。正しく言えない場合には、横（以下「場」と言う。）にカードを置きます。ただし、下図のような「ラッキーカード」や「アンラッキーカード」、「交換カード」、「雨カード」を混ぜておきます。「アンラッキーカード」は持ち札を場に出す、「ラッキーカード」は場のカードを取る（ただし、場にカードがなかったら、もう一枚めくることができる）、「交換カード」は自分のもち札を誰かと交換することができる、「雨カード」は全員3枚ずつ場に出すなど、ルールを工夫します。語彙の少ない児童・生徒も勝つチャンスがあり、意欲的にゲームに参加して周囲の児童・生徒の言葉を聞くことにより、更に語彙が増えます。ゲームに使用するカードの数や種類は、児童・生徒の実態や活動のねらいに合わせて調整してください。



ラッキーカード(2, 3枚)

アンラッキーカード(2, 3枚)

交換カード(1, 2枚)

雨カード(1, 2枚)